OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	体型印象管理予期と痩身願望の関連における調整要因：痩身評価の有無と現実の体型
Author(s)	鈴木, 公啓
Citation	対人社会心理学研究. 2015, 15, p. 7-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

体型印象管理予期と痩身願望の関連における調整要因

―痩身評価の有無と現実の体型―

鈴木公啓(東京未来大学こども心理学部)

本研究は、他者からの痩身評価の有無、そして現実の体型が痩身か否かにより、体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度が異なるか、若年女性を対象に検討することを目的とした。20 代の女性 333 名を対象として調査をおこない、体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期のそれぞれから痩身願望へとパスを設定し、また、体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の間には共分散を設定したモデルについて、多母集団同時分析により検討をおこなった。その結果、痩身評価の有無については、最も適切なモデルは、体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパスにのみ両群に等価の制約を置いたモデルであることが示された。痩身評価有り群においては、体型ポジティブ印象予期から痩身願望へのパスは有意であり弱い正の影響が認められたが、痩身評価無し群においては、影響が認められなかった。また、現実の体型が痩身か否かについては、最も適切なモデルは、すべてにおいて両群に等価の制約を置いたモデルであることが示された。印象管理の枠組みにおいて、実際に痩せているかどうかではなく、あくまでも他者から体型についてどのように評価されるかが、媒介要因として重要であることが示唆されたといえる。

キーワード:痩身願望、印象管理、結果予期、他者評価、体型

問題

痩身と印象管理

日本人女性の多くが年齢を問わず痩身願望を有しており、特に若年層において顕著である。国内でおこなわれた数多くの研究を概観すると、約 9 割の若年女性が痩身願望を有し、また、約 6 割の若年女性が痩身希求行動(ダイエット:痩せること、もしくは痩せた体型を維持することを目的とした行動)を経験していることなどが報告されている(e.g., 平野, 2002; 倉本, 2000)。このような背景もあり、若年女性を対象とした痩身願望や痩身希求行動についての研究が数多くおこなわれてきている。従来の研究の多くは、病理の観点からの検討がなされていたが(e.g., McFarlane, Polivy, & McCabe, 1999; Rojo, Livianos, Conesa, Garcia, Dominguez, Rodrigo, Sanjuan, & Vila, 2003)、近年ではより普遍的な観点である装いという観点からの検討もおこなわれている(Demello, 2007; 石田, 2000; 石井, 2003; 鈴木, 2005, 2012a)。

“装い”は、“自他を整え飾るために用いるすべてのものやそのための行為・行動、およびその結果としての状態”と定義され、時代や文化、そして性別を超えた、極めて普遍的におこなわれている行為といえる。化粧、着装、装身具による装飾、ボディペインティング、刺痕文身(所謂、入墨)、美容外科手術による美容整形、そして、纏足、首輪で引き伸ばされた長い首、瘢痕文身、ダイエッティングやボディビルディング、抜歯や頭蓋変形など、非常に幅広い種類の行為や状態が装いに含まれている。痩身体型(以下“痩身”も、痩身希求行動によって変工された外観の一状態であり、装いの 1 つといえる。

普遍的行為である装いという観点からの痩身志向性についての検討は、痩身志向性の心理機序の解明に際し、有用なアプローチとなりうる。実際に、装いという観点からの研究によって、自己像を肯定的に構築したり他者に肯定的な印象を与えるなどの、他の装いにも見られる心理的な働きが痩身にも存在することが明らかにされてきている(鈴木, 2012a)。この働きは、対他的機能という装いの心理的機能の 1 つといえる(e.g., 大坊, 1997; 高木, 1996)。社会に所属するためには、他者からの肯定的な評価が欠かせず、また、他者に受け入れられる際に外見は重要な要因である。そのため、人々は、魅力的な印象を他者に与え、そして他者に受容されることを目的として装いをおこなう(e.g., 大坊, 1997; Leary & Miller, 2000; 高木, 1996)。つまり、装いの背景には印象管理(e.g, Arkin, 1981; Leary & Kowalski, 1990; Schlenker, 2005)が存在する。装いの 1 つである痩身においてもそれは同様であり、痩身を印象管理の枠組みで扱う事の有用性がこれまでに示されている(鈴木, 2012b)。

印象管理に関わる要因はいくつか知られているが、これまで、痩身においては、体型によって他者が抱く印象が変化するという予期(以降、“体型印象管理予期”)が扱われ、検討がなされてきた(鈴木, 2012b)。この体型印象管理予期は、概念的には、Leary & Atherton(1986)のいう、"self-presentational outcome expectancy"の体型に限定されたものであり、印象管理の効力感(Leary & Kowalski, 1990)と同質の概念ということもできる(鈴木, 2012b)。

痩身における体型印象管理予期は、2 つの側面から

なる(鈴木, 2012b)。1 つは、痩身によりポジティブな評価が得られるとする予期(以降、“体型ポジティブ印象予期”)であり、もう 1 つは、現在の体型(非痩身)によりネガティブな評価が得られるとする予期(以降、“体型ネガティブ印象予期”)である。この 2 つは、印象管理の目的であるポジティブな結果の獲得とネガティブな結果の回避(Arkin, 1981; Leary & Kowalski, 1990)に対応している。体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期は、両者とも、痩身願望との間に正の関連が認められることが確認されている(鈴木, 2012b)。

体型印象管理予期と痩身願望の関連における調整要因

体型印象管理予期と痩身願望との関連について、特定の傾向を有する人々にとっては、その関連の仕方が異なる可能性が考えられる。つまり、調整要因としての影響を有する要因が存在する可能性がある。その 1 つに、自尊感情が想定される。自尊感情の理論の 1 つであるソシオメーター理論(Leary, & Baumeister, 2000; Leary, Tambor, Terdal, & Downs, 1995)においては、自尊感情は他者からの評価に対するシグナルをあらわすバロメータと位置づけられている。Baumeister, Tice, & Hutton(1989)は、自尊感情が高い者は肯定的な印象を獲得するために接近志向する傾向があり、一方、自尊感情が低い者は否定的な印象を回避するために回避志向する傾向があるとしている。このことを考慮すると、他者から体型を受容されていると感じている者においては、他者からの肯定的な評価への接近を目指し、それが痩身願望に結びつく可能性がある。一方、他者から体型を受容されていないと感じている者においては、他者からの否定的な評価からの回避を目指して、それが痩身願望に結びつく可能性がある。

鈴木(2012b)は、体型印象管理予期と痩身願望との関連について、自尊感情の程度により群分けし、検討をおこなっている。そして、予想とは異なり、自尊感情の程度によって体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度が異なるという結果は得られなかったことを報告している。これは、鈴木(2012b)が述べているように、自尊感情が必ずしも体型の評価のみを直接的に反映しているものではないことが原因として考えられる。

体型や容姿についての評価は、自己の他の側面への評価よりも、自尊感情や自己に対する全体的な価値等と密接に関連していることが、多くの研究にて示されているが(e.g., DuBois, Felner, Brand, Phillips, & Lease, 1996; 山本, 2010; 山本・松井・山成, 1982)、そのすべてが容姿によってのみ規定されるわけではない。自己の評価は容姿の評価や受容のみを直接的に反映したものではなく、知性や社交、経済力など、他の自己の諸側面に関する評価や受容も反映している。さらに、容姿についても、体型以外に相貌などいくつもの側面によって構成されている。そのため、他の側面の評価や受容が交絡して調整効果があいまいなものとなり、自尊感情の程度によって、体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度が異ならないという結果になった可能性がある。

このように考えると、自尊感情ではなく、より体型の評価に直接的に関連するものを調整要因として扱うことにより、体型印象管理予期と痩身願望との関連についての新たな知見を見出すことが可能になるのではないかと考えられる。その際、まずは、体型に対する自己評価を扱うことが考えられる。しかし、従来の研究により、極めて多くの人が自身を太っていると評価するという認知の歪みが生じていること、また、自身の評価はそもそも、他者からの評価や受容とは直接的に対応するわけではない事などから、扱う要因としては適切では無い可能性がある。次に考えられるのが、他者からの評価である。谷本(2008)は、一般的な身体加工(髪を切ったり、洗顔したりなど)の装いをおこなう理由、そして美容整形をしたい理由について、「同性から注目されたいから」、「異性に好かれたいから」、「自己満足のため」等の項目を用いて検討し、興味深い知見を得ている。外見の良さに対する自己判断である自信の有無で群分けした場合には、理由の選択割合に違いが認められた項目は少なかったが、他者による判断であるほめられる経験の有無で群分けした場合には、外見について他者から良い評価を得ていると、ポジティブな結果の獲得を理由として選択する割合が大きいことが示されている。そして、その理由には、「同性から注目されたいから」などの、他者からの肯定的な評価の獲得に関する項目が含まれている。これらを考慮すると、他者から痩せていると評価される経験の有無により、痩身によって獲得できるポジティブな結果についての意識に違いが認められる可能性がある。つまり、他者からの痩身評価の経験について扱うことにより、体型に対する受容の程度を適切に反映し、体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度についての検討をおこなうことができると考えられる。

目的

本研究では、体型印象管理予期と痩身願望との関連において、他者からの体型への評価が調整要因としての影響を有するか否か、若年女性を対象に検討することを目的とする。これまでの議論から、他者から痩身という評価がなされている者においては、他者からの肯定的な評価に焦点が向けられ、それへの接近というルートで痩身願望を抱きやすい可能性がある。つまり、体型ポジティブ印象予期と痩身願望の結びつきが強い可能性がある。また、他者から痩身という評価がなされていない者

においては、他者からの否定的な評価に焦点が向けられ、それからの回避というルートで痩身願望を抱きやすい可能性がある。つまり、体型ネガティブ印象予期と痩身願望の結びつきが強い可能性がある。以上、他者からの評価の有無により、体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度に上記のパターンが確認されるか検討する。

なお、同時に、現実の体型の影響についても確認する。鈴木(2012b)では、そもそも体型によって体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度が異なるかは確認されていない。今回、現実の体型によって、体型印象管理予期と痩身願望との関連の程度が異なるか否かについても明確にし、その影響について上述の他者からの評価との差異を検討することにより、比較的客観的な認識が印象管理のプロセスに影響を及ぼすのか、それとも、あくまでも他者の評価に対する認識が影響を及ぼすのか、その点についても明らかにすることができると期待される。もし、他者からの評価という要因が影響している一方、客観的な認識が影響していないのであれば、印象管理のプロセスにおける他者の評価の重要性とその働きを示すことができると考えられる。

方法

対象者

20 歳から 29 歳の女性 333 名を対象とした。5 歳刻みでおおよそ均等に割り付けて実施した。なお、調査に同意せずに途中で止めた 16 名、および、今よりも太ることを望んでいる 17 名のデータを除外し、300 名のデータを以降の分析に用いた。なお、平均年齢は 24.84 歳(*SD* = 2.76)であった。対象者の属性は Appendix 1 に示す。

実施時期および方法

2014 年 9 月に、調査会社を介してインターネット調査をおこなった。なお、回答者にはポイントが付与された。

調査内容

調査内容は以下の内容から構成される。

体型印象管理予期 鈴木(2012b)で使用している体型ポジティブ印象予期および体型ネガティブ印象予期の項目を使用した。これは、鈴木(2012a)における体型結果予期の一部である。今回は、体型ポジティブ印象予期の“同性からの評価”、および“異性からの評価”、また、体型ネガティブ印象予期の“同性からの評価”、および“異性からの評価”の 4 つを使用した。なお、各下位尺度は 4 つの項目から構成されている。体型ポジティブ印象予期の同性からの評価の項目は、“同性からうらやましがられる”、“同性からほめられる”、“同性受けが良くなる”、“同性から注目される”の 4 つである。体型ポジティブ印象予期の異性からの評価の項目は、“異性の注目をひくことができる”、“異性から好かれる”、“異性からほめられる”、“異性にデートに誘われる”の 4 つである。体型ネガティブ印象予期の同性からの評価の項目は、“同性受けが良くない”、“同性に注目されない”、“同性に良い印象をもってもらえない”、“同性に高い評価をもらえない”の 4 つである。そして、体型ネガティブ印象予期の異性同性からの評価の項目は、“異性受けがよくない”、“異性の注目をひけない”、“異性にモテない”、“異性にほめてもらえない”の 4 つである。これらの項目について、“1. まったくそう思っていない”から“6. とてもそう思っている”の 6 件法で回答を求めた。

痩身願望尺度 痩身願望の程度を測定するために、痩身願望尺度(馬場・菅原, 2000)を使用した。11 項目から構成されており、“1.まったくあてはまらない”から“5.非常にあてはまる”の 5 件法で回答を求めた。

痩身評価の有無 体型について、周りの人から痩せていると言われることがどのくらいあるか、“1. まったくない”、“2. たまにある”、“3. 時々ある”、“4. 頻繁にある”の中から 1 つ選択するように求めた。

現実の体型 現実の体型について、身長と体重の数値のセットを提示し、“1. 表の数値よりも自分の体重の方が大きい”、“2. ほぼ同じ”、“3. 表の数値よりも自分の体重の方が小さい”の 3 つから 1 つ選択するように求めた。提示した身長は 1cm 刻みとした。体重はその身長に対応する 20 代女性の平均的な体重を提示した[1)]。

体型についての希望 自身の体型について、どのようになることを希望しているか、“1. とても痩せたいと思う”、“2. 少し痩せたいと思う”、“3. このままで良い”、“4. 少し太りたいと思う”、“5. とても太りたいと思うから”の中から 1 つ選択するように求めた。ここで、4 または 5 を選択した者は、上述のとおり分析から除外した。

結果

予備的処理

痩身評価の有無についての、それぞれの選択肢の選択割合を Table 1 に示す。ここで、全体の分布と内容を考慮し、“1. まったくない”と回答した者を“痩身評価無し群”、“2. たまにある”、“3. 時々ある”、“4. 頻繁にある”と回答した者を“痩身評価有り群”とした。

Table 1 体型に対する他者からの痩身評価

	人数	%
1. まったくない	108	36.0
2. たまにある	79	26.3
3. 時々ある	69	23.0
4. 頻繁にある	44	14.7

現実の体型について、“1. 表の数値よりも自分の体重

の方が大きい”を選択したのは 111 名(37.0%)、“2. ほぼ同じ”を選択したのは 46 名(15.3%)、“3. 表の数値よりも自分の体重の方が小さい”を選択したのは 143 名(47.7%)であった。“1. 表の数値よりも自分の体重の方が大きい”を選択した者を“非痩身群”、“3. 表の数値よりも自分の体重の方が小さい”を選択した者を“痩身群”とした。なお、女性の体重の分布は若干の正の歪みを示すことが知られており、その点を考慮すると、今回の回答で示された分布は妥当と考えられた。

モデルの作成

体型印象管理予期から痩身願望への影響をあらわすモデルは、基本的には鈴木(2012b)に基づいて作成した。体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期のそれぞれから痩身願望へとパスを設定し、また、体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の間には共分散を設定した。なお、それぞれ、潜在変数に対応する顕在変数が若干多いため、複数の項目をまとめた新しい変数を作成し(Item Parceling; e.g., Bandalos, 2002)分析に使用した。体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期については、それぞれ 4 つ(同性で 2 つ、異性で 2 つ)のパーセルを作成して顕在変数とし、潜在変数へ対応させた。痩身願望については、3 つのパーセルを作成して顕在変数とし、潜在変数へ対応させた。

痩身評価の有無による検討

痩身評価の有無による、体型ポジティブ印象予期および体型ネガティブ印象予期と痩身願望との関連性のパターンの違いについて検討した。先述のとおり、対象を痩身評価無し群と痩身評価有り群にグループ分けし、上述の関連性について、両群で差異があるか、多母集団同時分析により検討した。まず、配置不変のモデルについて検討したところ、適合度は CFI = .982, RMSEA = .055, AIC = 257.317, $\chi^2(74) = 141.317$, $p<.001$ であった。次に測定不変のモデルについて検討したところ、適合度は CFI=.981, RMSEA=.053, AIC=251.042, $\chi^2(82) = 151.042$, $p<.001$ であり、測定不変が成り立つことが確認された。そこで、体型ポジティブ印象予期または体型ネガティブ印象予期のそれぞれから痩身願望へのパス、および体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散について、2 群で等値にするか否かの組み合わせによる複数のモデルを設定し適合度を算出した。結果、最も適切なモデルは、体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパスにのみ両群に等価の制約を置いたモデルであることが示された(Table 2)。なお、そのモデルの適合度は CFI, = .982, RMSEA = .052, AIC = 249.047 であった。

当該モデルにおける 2 群それぞれの潜在変数間の関連の値を Figure 1 に示す。痩身評価有り群においては、体型ポジティブ印象予期から痩身願望へのパスは有意であり弱い正の影響が認められたが、痩身評価無し群においては、影響が認められなかった。体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパスについては、両群共に強い影響が認められたが、大きな違いは示されなかった。体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散については、その関連の程度に多少の違いが認められ、痩身評価無し群の方が高値であったが、両者共に高い値であった。

現実の体型による検討

現実の体型(非痩身/痩身)による、体型ポジティブ印象予期および体型ネガティブ印象予期と痩身願望との関連性のパターンの違いについて検討した。先述のとおり、対象を非痩身群と痩身群にグループ分けし、上述の関連性について、両群で差異があるか、多母集団同時分析により検討した。まず、配置不変のモデルについて検討したところ、適合度は CFI = .978, RMSEA = .061, AIC = 144.286, $\chi^2(74) = 144.286$, $p<.001$ であった。次に測定不変のモデルについて検討したところ、適合度は CFI = .979, RMSEA = .058, AIC = 252.105, $\chi^2(82) = 152.105$, $p<.001$ であり、測定不変が成り立つことが確

Table 2 痩身評価の有無による多母集団同時分析における各モデルの適合度

	P→T	N→T	P⇔N	CFI	RMSEA	AIC
モデルa	○			.981	.053	251.009
モデルb		○		.982	.052	249.047
モデルc			○	.981	.053	251.227
モデルd	○	○		.981	.054	251.772
モデルe		○	○	.981	.053	249.231
モデルf	○		○	.981	.053	251.038
モデルg	○	○	○	.980	.053	251.492

注) P→T: 体型ポジティブ印象予期から痩身願望へのパス, N→T: 体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパス, P⇔N: 体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散。○は等価の制約をかけたことを示している。

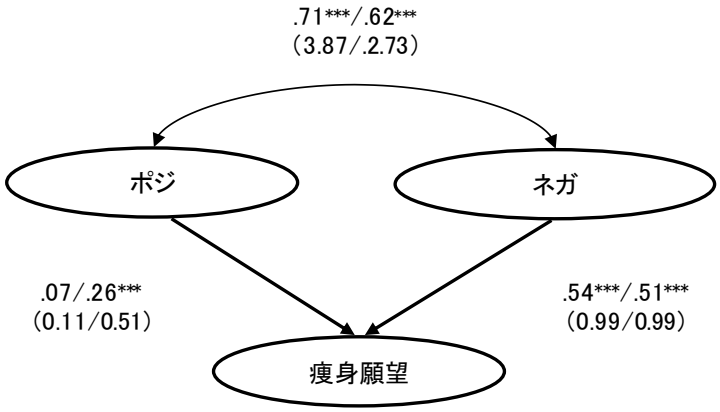

Figure 1　痩身評価の有無による多母集団同時分析の結果(model b)

注 1)　ポジ: 体型ポジティブ印象予期, ネガ: 体型ネガティブ印象予期。顕在変数および誤差変数は省略。

注 2)　数値は, 左が痩身評価無し群, 右が痩身評価あり群。括弧内は非標準化解。

注 3)　*** $p < .001$, 潜在変数から顕在変数へのパスは全て $p < .01$。

認された。そこで、体型ポジティブ印象予期または体型ネガティブ印象予期のそれぞれから痩身願望へのパス、および体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散について、2 群で等値にするか否かの組み合わせによる複数のモデルを設定し適合度を算出した。結果、最も適切なモデルは、すべてにおいて両群に等価の制約を置いたモデルであることが示された(Table 3)。なお、そのモデルの適合度は CFI = .979, RMSEA = .057, AIC = 248.336 であった。

当該モデルにおける 2 群それぞれの潜在変数間の関連の値を Figure 2 に示す。体型ポジティブ印象予期から痩身願望へのパスは有意であり両群共に弱い正の影響が認められた。体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパスについては、両群共に強い影響が認められた。体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散については、両者共に高い値であった。しかし、これらの関連性については、現実の体型による違いは認められなかった。

考察

本研究では、体型印象管理予期と痩身願望との関連において、他者からの体型への評価が調整要因としての影響を有するか否か、若年女性を対象に検討することを目的とした。また、現実の体型の影響についても、あわせて確認する事とした。痩身評価の影響については、構造方程式モデリングによる分析の結果、体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパスにのみ両群に等価の制約を置いたモデルが適切であることが示された。痩身評価有り群においては、体型ポジティブ印象予期から痩身願望へのパスは有意であり弱い正の影響が認められたが、痩身評価無し群においては、影響が認められなかった。体型ネガティブ印象予期については、群による違いは認められなかった。

Table 3　現実の体型(非痩身群と痩身群)による多母集団同時分析における各モデルの適合度

	P→T	N→T	P⇔N	CFI	RMSEA	AIC
モデルa	○			.979	.058	250.951
モデルb		○		.979	.058	251.153
モデルc			○	.979	.058	251.184
モデルd	○	○		.979	.057	249.236
モデルe		○	○	.979	.058	250.201
モデルf	○		○	.979	.058	250.117
モデルg	○	○	○	.979	.057	248.336

注)P→T:体型ポジティブ印象予期から痩身願望へのパス, N→T:体型ネガティブ印象予期から痩身願望へのパス, P⇔N:体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散。○は等価の制約をかけたことを示している。

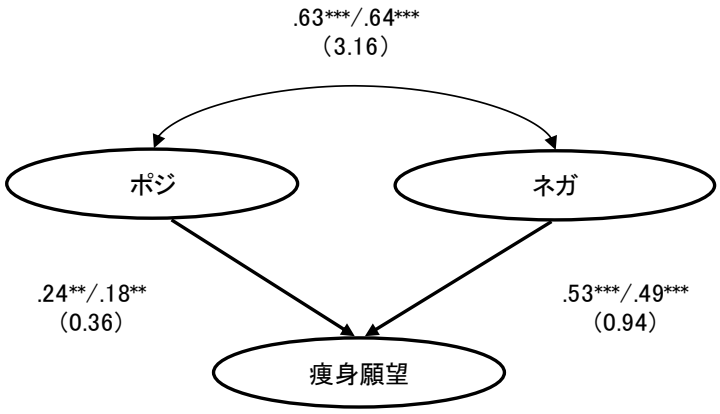

Figure 2　現実の体型（非痩身群と痩身群）による多母集団同時分析の結果（model g）

注 1）ポジ：体型ポジティブ印象予期，ネガ：体型ネガティブ印象予期。顕在変数および誤差変数は省略。
注 2）数値は，左が痩身評価無し群，右が痩身評価あり群。括弧内は非標準化解。
注 3）** $p < .01$, *** $p < .001$, 潜在変数から顕在変数へのパスは $p < .01$。

他者から痩身であると評価される者、つまり、現在の痩身をよしとする社会的基準において体型に対して他者から肯定的な評価を得られる者は、体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期がともに痩身願望へと影響を及ぼすが、そのような評価を得られない者は、体型ネガティブ印象予期のみが痩身願望へと影響を及ぼしているということが示されたといえる。体型ポジティブ印象予期については、当初想定した結果であった。体型を受容されているほど、ポジティブな印象を獲得するために接近志向し、それが痩身願望に繋がっていると考えられる。一方、体型ネガティブ印象予期については、当初想定した結果とはならなかった。これについては、以下のように考えることができるかもしれない。他者から痩身という評価を多少得ていたとしても、それが自身が求めている社会における受容の基準とするところまでは十分な痩身ではないと認識している可能性がある。実際、今回対象とした女性は、全員が、今よりも痩身を望んでいる者であった。集団において受容されるための体型の基準を満たしていないと認識しているために、痩身の評価を受けていてもそれが受容のシグナルとは十分にならず、他者からの否定的な評価の回避を目指して、痩身評価の有無にかかわらず体型ネガティブ印象予期と痩身願望が関連している可能性がある。

痩身評価の有無による今回の結果については、他の説明も考えられる。今回は、体型について、周りの人から痩せていると言われることがどのくらいあるかを尋ねる形で、痩身評価を受けているか否かの群分けをおこなっている。つまり、痩身評価を受けている者は、痩身である事に対してフィードバックを受けている者ということになる。それらの者は、その賞賛に強化されて、体型ポジティブ結果予期と痩身願望との結びつきが生じているのかもしれない。もし、体型について、周りの人から太っていると言われることがどのくらいあるかを尋ねる形で、痩身評価を受けているか否かの群分けをおこなった場合、今回と異なりネガティブな内容へのフィードバックを受けているか否かを反映することとなり、例えば肥満評価有り群と無し群で体型ネガティブ印象予期と痩身願望の関連の程度の違いが確認される可能性もある。

体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の共分散については、若干ではあるが、痩身評価無し群の方が高値であった。鈴木(2012b)においても、自尊感情の低い群において、体型ポジティブ印象予期と体型ネガティブ印象予期の関連が強いことが示されている。鈴木(2012b)が述べているように、印象管理のプロセスにおいて、状況によりポジティブへの接近とネガティブからの回避の目標のどちらに焦点をあてるかが柔軟に設定できていない可能性が、今回の結果からも示唆されたといえよう。

現実の体型の影響については、構造方程式モデリングによる分析の結果、すべてにおいて両群に等価の制約を置いたモデルが適切であることが示された。痩身評価の結果と合わせて考えると、印象管理の枠組みにおいて、実際に痩せているかどうかではなく、あくまでも他者からそれを評価されるということの方が、調整要因として意味をなすことが示唆されたといえる。つまり、客観よりも他者による評価という主観に基づく評価が、印象管理

のプロセスの中で働きを有していることが示唆されたといえる。

ところで、体型ネガティブ印象予期と痩身願望との関連の程度は調整要因の有無にかかわらず全体として強く、体型ポジティブ印象予期と痩身願望との関連の程度は、痩身評価の有無による違いはあるにしても、全体としてそれほど強いものではなかった。これは、鈴木(2012b)における結果と比べると、前者はより強く、後者はより弱いものであった。この違いには、対象の違いが影響している可能性も考えられる。鈴木(2012b)は、主に20歳前後の大学生を対象としている。しかし、今回は20歳から29歳の、会社員やパート・アルバイト、専業主婦などの幅広い職業の者を対象としており、また、対象の8割が未婚である(Appendix 1を参照)。学生という特殊な環境から社会という環境に移行することにより、他者からの評価は体型やその他の側面でその性質が変わってくる可能性はある。また、年齢特有の未婚という状態における体型やその評価の重要性なども、変化している可能性がある。さらに、20歳前後は、第二次性徴を経てすでに体型が安定しているが、24歳～26歳頃に体型の変化するポイントがあることも指摘されており(ワコール人間科学研究所, 2000)、今回の対象において、体型の変化、そして体型に対する評価も意味も、20歳前後の年代とは異なっている可能性がある。このように、他者からの否定的な評価の回避全般における、体型そしてそれへの自他の評価の位置づけや意味、そして同時に、他者や社会との関係性が変化して、今回のような結果が得られた可能性がある。なお、めまぐるしく変化する近年の社会において、非痩身の価値の低さが強まり、そのことが影響した可能性も考えられるが、この点については、慎重に検討を進める必要があろう。

最後に、体型ネガティブ印象予期から痩身願望への影響の大きさが、大きな問題を孕んでいる可能性について指摘したい。Suzuki(2013)において、体型ネガティブ印象予期は非構造的ダイエット(絶食など急激に体重を減らそうとする不健康なダイエット)と結びついていることが示されている。体型についてのネガティブな印象を回避するという回避志向のルートが、問題を生じさせやすいプロセスである可能性が示唆されており、注意が必要であろう。体型に対する評価の自己全体の評価に対する重み付けについての心理教育的介入が、非痩身による自己受容の低下の緩和や問題のある行動の予防などに有用な可能性はある。その点も、今後検討を進めていくことが重要と考えられる。

以上まとめると、他者からの体型への評価により、印象管理予期が痩身願望へ及ぼす影響が異なることが確認されたといえる。これは、痩身の印象管理モデルの精査に寄与したといえる。また、新たな課題も確認され、今後さらに検討する必要性も示されたといえる。

引用文献

Arkin, R. M. (1981). Self presentation styles. In J. T. Tedeschi (Ed.), *Impression management: Theory and social psychological research*. New York: Academic Press. pp. 311-333.

馬場安希・菅原健介 (2000). 女子青年における痩身願望についての研究 教育心理学研究, **48**, 267-274.

Bandalos, D. L. (2002). The effects of item parceling on goodness-of-fit and parameter estimate bias in structural equation modeling. *Structural Equation Modeling*, **9**, 78-102.

Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989). Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality,* **57**,1467-6494.

大坊郁夫 (1997). 魅力の心理学 ポーラ文化研究所

Demello, M. (2007). *Encyclopetamdia of body adornment*. Westport, Conn: Greenwood Press.

DuBois, D. L., Felner, R. D., Brand, S., Phillips, R. S. C., & Lease, A. M. (1996). Early adolescent self-esteem: A developmentalecological framework and assessment strategy. *Journal of Research on Adolescence*, **6,** 543-579.

平野和子 (2002). 女子学生のボディイメージとダイエット行動について 神戸文化短期大学研究紀要, **26**, 1-12.

石田かおり (2000). 化粧せずには生きられない人間の歴史 講談社

石井政之 (2003). 肉体不平等―人はなぜ美しくなりたいのか― 平凡社

厚生労働省 (2013). 平成 23 年度国民健康・栄養調査報告 <http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/eiyou/dl/h23-houkoku.pdf> (2014 年 9 月 29 日)

倉元綾子 (2000). 若者のダイエット経験と食生活の実態鹿児島県立短期大学紀要, **51**, 51-69.

Leary, M. R. & Atherton, S. C. (1986). Self-efficacy, social anxiety, and inhibition in interpersonal encounters. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **4**, 256-267.

Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. In M.P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 32). San Diego, CA: Academic Press., pp. 1-62.

Leary, M., & Kowalski, R. (1990). Impression management: A literature review. *Psychological Bulletin*, **197**, 34-47.

Leary, M. R., & Miller, R. S. (2000). Self-presentational perspectives on personal relationships. In W. Ickes & S. Duck (Eds.), *The social psychology of personal relationships*. Chichester, UK: John Wiley & Sons. pp. 129-155.

Leary, M. R., Tambor, E. S., Terdal, S. K., & Downs, D. L. (1995). Self-esteem as an interpersonal monitor: The sociometer hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 518-530.

McFarlane, T., Polivy, J., & McCabe, R. E. (1999). Help, not harm: Psychological foundation for a nondiet-

ing approach toward health. *Journal of Social Issues*, **55**, 261-276.
Rojo, L., Livianos, L., Conesa, L., Garcia, A., Dominguez, A., Rodrigo, G., Sanjuan, L., & Vila, M. (2003). Epidemiology and risk factors of eating disorders: A two-stage epidemiologic study in a Spanish population aged 12-18 years. *International Journal of Eating Disorders*, **34**, 281-291.
Schlenker, B. R. (2005). Self-Presentation. In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of Self and Identity*. New York: Guilford Press. pp.492-518.
鈴木公啓 (2005). 装いとしてのダイエット―イメージ,そして興味と経験の側面から― 繊維製品消費科学, **46**, 725-731.
鈴木公啓 (2012a). 装いの枠組みによる痩身の心理的機能と効用についての確認―体型結果予期の分類および痩身願望との関連― パーソナリティ研究 **21**, 164-175.
鈴木公啓 (2012b). 痩身願望および痩身希求行動の規定要因―印象管理の観点から― 心理学研究, **83**, 391-399.
Suzuki, T. (2013). The relationship between positive and negative aspects of body outcome expectancy and normal/neurotic dieting behavior. *The 4th Asian Cognitive Behavior Therapy (CBT) Conference 2013 Tokyo* (A-P-028).
高木 修(監修)・大坊 郁夫・神山 進(編) (1996). 被服と化粧の社会心理学 北大路書房
谷本奈穂 (2008). 美容整形と化粧の社会学―プラスティックな身体― 新曜社
ワコール人間科学研究所 (2000). SPIRAL AGEING―はじめて見えてきたエイジングの真実― 株式会社ワコール広報室
山本ちか (2010). 大学生の全体的自己価値の検討 名古屋文理大学紀要, **10**, 15-22.
山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, **30**, 64-68.

註

1) 20 代女性の平均的な BMI は 20.80 であることが報告されている(厚生労働省, 2013)。そこで、それぞれの身長に対して、この BMI に相当する体重を計算し、その値を提示した。

Appendix 1 対象者の属性

職業	公務員	6	(2.0)
	会社員	107	(24.7)
	自営業・自由業	7	(1.0)
	パート・アルバイト	53	(17.7)
	専業主婦	26	(8.7)
	学生	60	(20.0)
	その他	41	(13.7)
未婚・既婚の別	未婚	242	(80.7)
	既婚	58	(19.3)

注) 括弧内はパーセンテージ。

The moderating effect on the relationship between body outcome expectancy of others' evaluation and drive for thinness:

Focusing on others' references of the body and the real state of the body

Tomohiro SUZUKI (*School of Child Psychology, Tokyo Future University*)

This study investigated the moderating effects of others' references of the body and the real state of the body on the relationship between body outcome expectancy of other's evaluation and drive for thinness in the framework of impression management. Participants (twenties female, n=333) completed an online questionnaire. Multi group structural equation modeling showed that others' references of the body had a moderating effect on the relationship between body outcome expectancy of others' evaluation and drive for thinness. The relationship between positive body outcome expectancy of others' evaluation and drive for thinness were larger for people who received a slim body evaluation than that for people who did not received that evaluation. On the other hand、 the results showed that the real state of the body did not have a moderating effect on the relationship. It is revealed that, others' references of the body, but not the real state of the body, had a moderating effect on the framework of impression management.

Keywords: drive for thinness, impression management, outcome expectancy, others' evaluation, body.